

持っている。先に述べたように、地元の自然へのこだわりを持ち、地元の自然を守ってゆくためには、チョウやトンボだけでなく、いろいろなグループの生物が好きな人が多くいた方が心強い。これから、虫だけでなく植物にも強いとか、好きだという人たちに積極的に加わってもらった方がよいだろう。地震との関連だけではないが、地質や化石が好きな人でも、地元こだわりの人なら、巻き込んで虫も好きになってもらうと、違った角度から

地元の自然を見る目が育つだろう。願わくば、会の拠点になる博物館施設（学芸員などいる）などが欲しいところだが、当分は竹野にある但馬自然史研究所を、仲間同士の情報交換や刺激を得る場所として活用して欲しいと思う。今後、但馬むしの会の活動が益々発展し、充実した内容のIRATSUMEが続いて刊行されてゆくよう、心から願っている。

解消されない問題

高橋 匡

IRATSUME No.10に『「但馬むしの会」10年の歩み』と題して所感を書いてから、すでにもう10年が経ってしまった、というのが実感である。

前回も後継者の問題に触れたが、10年後の現在もいっように問題は解決していないように見える。確かに永幡君らも加わって、一見活気を呈しているようにみえている。しかし、実態はいよいよ深刻さを増しているというのが本当ではないだろうか。人はやがて結婚して子供をもつようになる。その子供の成長に無関心な親などはあり得ない。いずれ本会への関わり方にも変化を生じざるを得ない。その時に現在の役割を誰が引き受けてくれるのか、それを思うと暗然とならざるを得ない。一人一人が好きなことを勝手にやっているうちはよい。それをまとめて会誌にしたり、会の運営に心を注いでくれたりする人達がいなければ、会は雲散霧消してしまうばかりである。確かに黒井さんや山本さん達によって20周年は迎えられた。しかし、その後はどうなるのであろうか。後継者がなければ、自然消滅すればよいのか。誰もそうは考えないだろう。犠牲的精神とか責任感とかいう言葉が通用する時代が去ったとは考えたくはないが、もう少し楽しんでそういう役を受けるというくふうはできないのであろうか。来年の1月3日の総会には、何とか若い後継者が得られるような議論がぜひ必要であらうと思う。ネコに鈴をつけるネズミの会議のようにならないことを切に希望する。

昆虫少年を育んだ故郷の野山

磯野 昌弘

「但馬の自然」ということを考えた時、多くの人は扇ノ山や蘇武岳といった原生的な状態を多く残した地域を思い起こすに違いない。しかし、残念ながら、私はこうした素晴らしい但馬の自然にあまり興味を示さないまま、但馬を離れることになってしまった。私が慣れ親しんだフィールドは、浜坂町の宇都野神社の森であり、岸田川の河川敷に広がる草原であり、観音山や城山といった人里の身近な自然であった。私には、珍しい虫を採りたいという志向はほとんどなかった。こうした私の志向は虫を始めるにあたっての動機と深く関わっている。

虫採りといえば、子供の頃の夏休みの宿題と決まっていた。そんな少年時代を過ごし、高校生になった頃に抱いた「これまで、虫採りといえば、夏だけだったけど、他の季節にも虫はいるよな。そして、自分が少年時代に慣れ親しんだフィールドには、1年間を通して調べてみたらいったいどれだけの虫が生息しているのだろう。よし、自分の住んでる町にどれだけの種類の虫がいるのか調べてやろう」という単純な思いが、私を虫の世界へと誘っていった。それからというもの、3日とあけず、ピーティングネットを片手に近くの野山をかけ回った。今から思えば、同じフィールドに日参して虫を採り、観察し続けることが私のすべての出発点になったと思う。虫にも、それぞれ棲み場所や木の種類に好みがあったり、出てくる時期が決まっていたりするんだということを、そういった体験の中で肌で実感していくことができた。幸いにして、虫の研究で飯を食べていけるようになった今も、ここぞと決めたフィールドに足繁く通って、

その森の昆虫相を解明したり虫達の生息を把握するためには、
 虫達やその頃の生態環境や気候を調査する必要がある。今
 も近年、『生物多様性』という言葉をよく耳に頻りに聞
 うのはが言葉が何を指し示すのかを正確に把握し、自分
 達の「生物相の保全」のために市民権が果たされたいと思
 いで欲するべきことではあるが、調査に際しては私達はそれを実
 践するのに必要なデータを把握し、持ち帰る必要はないのだ
 ろうか?と思わずにはいられない。但馬を離れて18年が
 経つと、あの頃の昆虫相も大きく変わってしまったのだ
 ろう。地元の自然の素晴らしさをきっちりと記録し続け
 ておくことが大切である。「保全」という面から見れば
 少々積極性に欠けるかも知れないが、足繁くフィールド
 に通ってそういった地域のデータを蓄積し重ねていくこと
 が地域同好会の一つの社会的役割ではないだろうか。

五 櫻 賦

~~圖書集成醫部全錄卷之四十五 醫部全錄卷之四十五 [IMUSTAGH] 醫部全~~

ブサと出会った場所

アノ世の闇で、ロに由る自滅するまで、この
 藍の黒い眼が、**永幡 嘉之**
 試みは、彼等の心を、

上鳥取に引越した年間間は時本当に眠るが、馬に通った夢である。会出かおる先陣もぐて但馬であり、七探すた虫やうま屋朝ほどんどが但馬のかむのだった。半養樹を初高校生の頃からスズバネの花や草を採りて来たり、低地に在る場所とは但馬に慣れがのだから、動機からして昆虫の低位分布、つまり瀬戸内では山地にじがいな昆虫が平地にもたくさんいるという現象を意識した上のものではあつた。その後、私の興味はこの低位分布と直間問題に終始してゐる。また例でも夢中になつたのが、標高の低傾地域のオナモミで、長たの川沖平太、ふゆとさく臨海県民としての自分、スズバネ科近縁の植物界、ふゆとさくスズバネが低地にも分布するといふことと握手するに知っていたが、1992年以降、スズの開芽時期が他の植物より早い。若嶺の時期を進めば分布調査も兼ねることになり、早春の山歩き回りで、当初は温泉町鐘尾や檜尾に見られる山野な、集落の脇に存在する暖かな林に驚いていたが、そのうち徐々に山系深奥のあたりへ進むうちに、海がらすの場所には僅置するまでの起伏に富みたる山や沢、大部分がブナに覆われており、貿易所によつては芒茅林の中にスズバネ科植物の生が見られ、そして独特の植物相をみせる。>低標高ながらゴアヤシ類や植物がミセリ、川原り谷のそばに生息してゐた間のスズバネ科植物群

[illegible]